

「歴史は失われた過去か」内山節
「文化としての科学技術」毛利衛



三年 組 番 名前

◎文明と文化の違いを考察しよう

平田オリザ『下り坂をそろそろと下る』講談社現代新書

文明と文化の違い

司馬遼太郎さんは、文明と文化の違いということを繰り返し書いている。

簡単に定義するならば、文明は客観的合理性を持ち、だれもが参加できる普遍的なもの。文化は逆に、不合理なものであり、民族などの特定の集団においてのみ通用する特殊なもの。

司馬さんはまた、「日本は文化は創ることができるが、文明を創り出し、輸出できるような国ではない」とも繰り返し述べている。文明は、民族や国境を越えて伝播する。異なる言語を話していても、中華文明圏の多くの国が漢字を使うようになった。アルファベット、アラビア文字も同様だ。あるいは、世界中の人間がナイフとフォークで食事をするようになったり、世界中の若者がジーンズをはくようになったり、これらもまた「文明」と呼んでいいだろう。

司馬説では、このような文明を生み出せるのは、国家の中に多民族を抱えた連邦国家のみである。中華文明、ヨーロッパ文明、アメリカ文明、イスラム文明……日本文明という言葉はない。たとえばサミュエル・ハンティントンが『文明の衝突』のなかで、「日本文明」を世界の八つの文明の一つに挙げているから異論もあるだろうが、しかしハンティントンは、その文明圏を日本一国に限っているので、少なくとも司馬さんの定義でいえば、やはりこれは「文明」とは言えない。

異なる文化が混ざり合い、押し合いへし合いしながら、やがて文明と呼ばれるものが生まれる。ただし、それは川底を転がりながら丸くなった石のように、えてしてつまらないものであり味気ないものかもしれない。

文明の味気なさに耐える

もちろん、一つの民族、一つの文化の中にも、様々な感性を持った人々が暮らしている。性同一性障害と同様に、文化の同一性障害も当然、存在するだろう。

韓国人の中にも、きちんと計画を立てて物事を遂行する日本の風土を心地よく感じる人も多くいる。あるいは、日本人の中にも、新幹線の車中で、一分の遅れをうるさくアナウンスされることを疎ましく感じている人間も一定数いるだろう。

もう一点、異文化理解や相互交流には、「自分たちの標準とするものが、世界の標準であるとは限らない」という認識を、きちんと持っているかどうかという座標軸がある。

だから、これをマトリックスで考えるなら、四つの象限がここに立ち現れる。

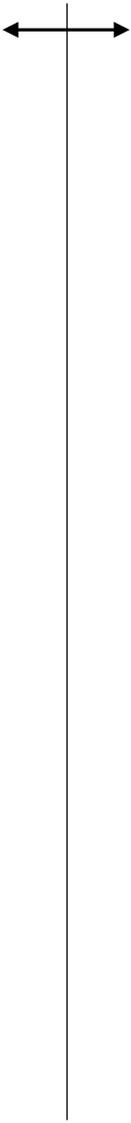
- 一、自国の文化を愛し、それを標準として他者にも強要してしまう人。
- 二、自国の文化を愛しつつも、それが他の文化にとっては標準とはならないことを知って、適切に振る舞える人。
- 三、自国の文化に違和感を感じ、それを強制されることに居心地の悪い思いをしている人。あるいは、自国の文化に自信を持たずに、他国の文化を無条件に崇拜してしまう人。
- 四、自国の文化に違和感を感じても、それを相対化し、どうにか折り合いをつけて生きていける人。

異文化理解を進めるということは、とりもなおさず、二と四の象限の住人を増やしていくことに他ならない。

先にも記したように、文明はときに味気ない。人々は、多くの場合、自分の文化に安住しがちだし、それもあながち間違っていない。しかし、すでに私たちが国際社会に生きて、他国と没交渉ではいられない以上、一定程度、その味気なさに耐える力を身につけておくてはならない。自国の文化の一定部分を譲り渡す寂しさに耐えなければならぬ。四国

作業1

文章を読みながら対比になる言葉を抜き出そう。



作業2

文明と文化の違いを自分の言葉でまとめてみよう。

--	--	--	--